

## 万葉思<sup>しの</sup>ひ草 二

### —をみなへし幻想—

升 田 淑 子

作者不明歌、いわゆる民謡は、中臣女郎の作歌領域を固める強力な基盤であったように思う。女郎が大伴家持に贈った次の歌は、見る通り巻十の歌と類歌関係にあって、同形の構成を持つことは明瞭である。

をみなへし佐紀沢に生ふる花かつみかつても知らぬ恋もするかも (中臣女郎 巻四—六七五)

女郎花咲く野に生ふる白つつじ知らぬこともて言はれしわが背 (巻十一—一九〇五)

歌い起しから第三句までの形を見ると、まず「をみなへし」から「咲く」の意を開き、そこから「佐紀沢・咲く野」へと音の関係を敷衍して場を設定する。さらに、そこに「生ふる(花)」と連鎖して行きながら再び音の関係によって本旨を導き出す序を形成する。上から下へと流れるように展開して行く叙述式表現と音のリズムは、心地良い謡いもののである。しかし女郎の歌には、形を民謡という歌の公共性に倚りながら、しかも民謡を抜きん出て自己の思いの奥に踏み込もうとする個の意志の発揚があり、その故に女郎独自の言語空間が現出されているのである。

中臣女郎は集中にここ一例のみしか見られない「花かつみ」の音をたくみに「かつて」に掛けて、私のあなたへの恋は「かつても知らぬ恋」と告白する。「花かつみ」が集中に一例なら、すでに強める意味を付帯する副詞「かつて」をこのような序で一層強調するという手法も、集中には女郎のこの歌にしか見られないのである。「かつても知らぬ恋」は言わんとする意味は明確で散文的なニュアンスを持つが、「をみなへし佐紀沢に生ふる花かつみかつても」と続けることによって詩情が豊かに膨らみ、鋭角的な言葉は情意溢れる歌言葉となって、最後の詠嘆「かも」と響き合う。この表現を生

んだ女郎の言語感覚は、「白つつじ知らぬこともて」と歌う民謡の、素直な音の繋がりや平淡な表現を真似ることはなかった。家持への恋がいかに衝撃的であったか―それは新鮮だったというのか、躍る心をおさえ切れないほどだったというのか分らないが、その中枢となる副詞「かつて」を他に例を見ない序で飾るという手法をとる上で、女郎にとって「花かつみ」は唯一絶対の花だったのであろう。

「花かつみ」を『万葉集』では「花勝見」と表記しているが、「花かつみ」は「かつみ」をいう。『広辞苑』、『日本国語大辞典』（小学館）では、「花かつみ」を水辺に生える草の名であり実体については諸説あると説明しているが、「かつみ」については、『広辞苑』は万葉表記を採用した上で「（かつみぐさの略）マコモの異称」と記し、『日本国語大辞典』にも「まこも（真孤）の古名」とあって、現在では「真孤」説に落着いているように見える。しかし、「花かつみ」の実体は中臣女郎の歌を含めて中古以降、不明であった。源俊賴の歌集『散木奇歌集』にはそのことを伺わせる記述と歌がある。

卷第十雜部下に「中納言国信の坊城の堂にて人人よませけるに、向泉述懐といふ事をよめる」という詞書を持つ長歌の中に、「花かつみ かつみるさまは まこもにて」（二五二〇）と歌う一節があつて「花かつみ」を「真孤」であるという一方で、卷第九雜部上には「はなかつみといへる事ある人のよみたりけるを、いかにいふことぞとたづねければ、ようもしらぬ事をしりがほにいふと聞えければ心のうちに思ひける」と詞書で述べて「しぎのゐるたま江におふるはなかつみかつよみながらしらぬなりけり」（二三七〇）と詠んでその曖昧さを露呈しており、「花かつみ」が何であるかを特定できなかった当時の様子が知られる。芭蕉も『おくのほそ道』の中で「花かつみ」に触れている。紀貫之が手習の最初に置いたという歌二首（『古今和歌集』仮名序）の内の一首にも歌われている有名な歌枕である安積山にさしかかった時、『古今和歌集』の「陸奥の安積の沼の花かつみかつみ見る人に恋ひやわたらむ」（卷十四 恋四―六七七）を思い起こしてのことであろう、次のような一節を記し留めている。「かつみ刈比もやゝ近うなれば、「いづれの草を花かつみとは云ぞ」と、人々に尋侍れども、更知人なし。沼を尋、人にとひ、かつみ／＼と尋ありきて、日は山の端にかゝりぬ。」と、「花かつみ」を知る人に向出会えないで、「かつみ／＼」と思い詰めたように尋ね歩いた様子が、俳人芭蕉のひたすらな姿を髣髴とさせて面白いのだが、ここでも「花かつみ」は、人口に膾炙されながら具体的な植物に特定されていなかったことを物語る。十七世紀のイエズス会士達の手によって編集された『日葡辞書』には「Catunigusa カツミグザ（勝見草） 淡水に生えるある草」とあって、ほとんどがこの程度の認識であったのかも知れない。一方、『無名抄』に、陸奥国では五月五日に家

毎に菰を茸く風習があるが、それを「菰<sup>あやめ</sup>茸く」という。しかし、この国には菰蒲のないことを正すと「さらば安積の沼の花かつみと云ふ物あらん。それを茸け」といったという話が載っている。話はやや複雑だが、橘千蔭の『万葉集略解』では「陸奥にて今花菰蒲に似て花の四ひらなるものをつみと言へり。これぞまことのものなるべき」と、あやめ科の花に似た菰蒲のようであると力説している。武田祐吉『万葉集全註釈』、窪田空穂『万葉集評釈』などは、白井光太郎の、野生の花菰蒲の一種で日光では赤沼あやめと呼んでいるという説に従っている。なお「花かつみ」についての解説は、『略解』説をとる沢瀉久孝『万葉集注釈』に詳しい。以上のように、「花かつみ」には大きく「真菰」「菰蒲」の二説が行なわれているが、中臣女郎の歌の中ではどちらの可能性がより高いかといった文芸的な探究は、それが主観に陥り易い方法であるということもあって、ほとんどなされていない。ただ、女郎には明瞭な「花かつみ」の姿があったのであるから、やはりその花の正体を定めたいと思う。このような中で、時代は下るが、次の歌は「花かつみかつて」の表現に文芸的示唆を与えてくれるものとして興味深い。『夫木和歌抄』に、藤原為家の「花かつみ」の歌がある。

花かつみ生ふる沢辺の女郎花<sup>かつて</sup>都も知らぬ秋やへぬらん（巻十一 秋部二―四三〇三）

この歌は中臣女郎の歌を本歌とすると考えられるが、おそらく出典も作者も不明のまま伝承歌として享受されていた歌を、為家が目に留めたのであろう。為家の歌は「花かつみ」と「をみなへし」の位置を入れ換えることによって、「をみなへしの秋」に主題が転換している。したがって「をみなへし」には「咲く」と続かず、女郎が歌の中核としてこだわった「花かつみかつて」と掛けた音の流れも途絶えて、女郎の歌の持つ華やかさが失われた。『万葉集』巻七にある「女郎花生・沢辺之・真田葛原何時かも絡りてわが衣に着む」（一三四六）の二句目「生沢辺之」には、「生ふる沢辺の」「咲く沢の辺の」の二通りの訓が行なわれており、為家の二句目もそのまま『万葉集』によっているのかも知れないが、為家の歌は上三句の中の植物の置換によって、「をみなへし」が中心に浮き上つてくると同時に休止が入る。意味は「花かつみが生えている沢の辺に咲くをみなへしよ」ということになるうか。要するに為家は「都も知らぬ」を独立した成句として受け止め、女郎の歌の構造のような、「かつて」を強める修辭を求めなかったのである。しかしそこにこそ、女郎が「花かつみかつて」に傾けた強い表現意識が働いていたことが、為家の歌を透して見えてくるのである。

『万葉集』では一例のみであるから中古の『古今和歌集』以降ということになるのだが、「花かつみ」が歌われている形を見ると、たとえば「夏はまた安積の沼の花かつみかつ見る色にうつる恋かな」(藤原家隆『壬二集』「最勝四天王院御障子」和歌一八八五)、

「さみだれに浅沢沼の花かつみかつみるまゝにかくれゆくかな」(藤原顕仲朝臣『千載和歌集』巻第三 夏歌 一八〇)、また、

『狭衣物語』の中で、飛鳥井女君が狭衣に見せたはかなげな歌「花かつみかつ見るだにもあるものを安積の沼に水や絶えなむ」(巻二)のように、花そのものではなく、音の面白さを鑑賞して「かつ」に掛るのである。もっと言えば、先の

『古今和歌集』安積山の歌にもそうであったように、「かつ見る」と掛けて行くのが通例なのである。「花かつみ<sup>△△</sup>かつ見る」と、単純ではあるが音が重なり合って弾みがつく。為家が「花かつみかつて」と続けなかったのは、右のような、「花かつみ」には「かつ見る」という習熟された表現があったことと、「かつても知らぬ」への強い傾斜があった為ではないかと思う。為家は、ただでさえ趣のある秋のさらなる奥深さを鮮明にする言葉を、女郎の歌の中に選り取ったのであった。

中臣女郎の歌に中古以降から逆照射して行くと、やはりその特殊性が際立ってくる。古歌や民謡を踏まえることによって陥り易い平板さや、固定された観念・表現から逸して、もっと自由な歌の空間へと言葉を広げ、独自の表現世界を作り出そうとする知的営為が見えてくる。「花かつみかつて」と継ぐ一つの新しい表現によって、他とは異なる心情が立ち現われ、民謡を凌駕する。これは、前回に述べてきた「直に逢ひて見てはのみこそたまきはる命に向ふわが恋止まめ」(巻四一六七八)と、歌における着想や言語意識が全く同じ方向を目指しているのである。天平十九年三月三日、歌の詞書に「幼き年にいまだ山柿の門に逕らずして、裁歌の趣は詞を聚林に失ふ。」(巻十七一三九六九)と、言葉の選択がいかに難しさを語っていた家持である。女郎の歌に大きな刺激を受けたことであろう。それは、家持周辺の女子たちの多くがそうであったような、単純な民謡への追従や模倣による歌作ではなく、民謡に入って民謡を脱しようとする女郎の、立体化する言葉の力にある。

さて、中臣女郎の「花かつみ」は何を指しているのかという問題が残されているが、今次のように推測しておきたい。民謡における「白つつじ」が「をみなへし」の咲く野の中で色彩的に際立っていたように、女郎の「花かつみ」も女郎の目を引く花であったことは言うまでもないであろう。「花かつみ」が「かつて」へ掛けて行く手法が稀有であった(皆無と言ってもよい)点を重視して見ていくと、この関係が単なる音の関係のみではなく、そこから意の関係へと及んで行く積極的具体的な表現となつて一首の前面に押し出されてきて、「花かつみ」の中に女郎自身が寓意されていてもおかしく

はないと考えられてくるのである。「をみなへし」の群の中で一際目につくのは、「花かつみ」が女郎の情意そのままであるからなので、原文の「勝見」に表意を見るならば、この意味を助けてくれるであろう。したがって、かきつばたや菖蒲のようなアヤメ科（菖蒲はサトイモ科ではあるが）の美しい色の花がふさわしい。時代は下るが「催馬楽」の「我が門に」と題する歌謡の中に「御園生の 御園生の 菖蒲あやめ（原文安也女）の群の 大領の 愛娘おとめといへ 季娘おとめといへ」とあるのも参考になるう。「催馬楽」を引いたついでに言えば、この中の「御園生」、女郎の「をみなへし佐紀沢」はこうしたところへ通じて行く観想を持っていたのではないかと考えている。中古以降、「をみな」の名を負って、おんな・遊女のイメージが汎溢したが、『万葉集』の「をみなへし」にはその意はまだない。このことはすでに指摘されており、また歌からも明らかに読み取ることができるのであるが、それならば、万葉人が「をみなへし」を如何に見たかが女郎の歌を解釈する上にも係ってくることになるう。

「をみなへし」ほど観念化された女の姿が、多様に露骨に和歌の中に詠われた花もそうはあるまい。日本のどこの山野にも見られる多年草で、秋になると黄色い（和歌では山吹色やくちなし色）五弁の小さな花を茎の天辺に平状に並べた花序を作る。『倭名類聚鈔』には「新撰万葉集云女郎女倭歌云女倍芝乎美那閉芝 今案花如蒸栗也所出未詳」とある。現代でも長野から東北地方ではアワバナ（栗花）と呼んで、おみなえしの「えし」を飯の意で「めし」とも言う（『しなの植物考』丸山利雄 信濃毎日新聞社 昭和四七・三・一〇）そうである。もっとも、『箋注倭名類聚抄』によると蒸した栗とは花の色のことであり、「をみなめし」は鎌倉・室町時代頃から盛んになる呼称なのだが、たしかに穀類が連想されるような花である。謡曲「女郎花」や『東雅』に、入水した小野頼風の妻が「をみなへし」となって咲き出るといふ話があるが、しかし、「をみなへし」の語源は明らかではない。

『日本国語大辞典』（小学館）にいくつかの語源説が見られるが、その内の「(1)花の色は美女をもへス（丘）という意か『古今要覧稿・大言海』」（但し、『大言海』は『古今要覧稿』の説を上げた後に、「イカガ」と疑義を挟んでいる）「(2)オミナウエシ（女植）の略。『東雅・滑稽雑談所引和訓義解』」が参考になるうか。松岡静雄『新編日本古語辞典』（乃江書院）に「ナデシコと同様に花の姿をめでて、歌人等がヨミナハシと称へたのがヨミナヘシと訛つて通称に用ひられるやうになつたのであらう。」とあるのは、万葉的視点で魅力的ではあるが、賛える意の感動詞ならば「エシ」で、仮名が違うので問題がある。他に「綜し（糸をはたおり機にかけること）」が含まれていると見る、八代集の七夕と重ねた発想から説明したもの

(吉野樹紀『古代の和歌言説』翰林書房 二〇〇三・三・二〇) などがある。

『万葉集』の表記は、万葉仮名で「乎美奈敝之、乎美奈弊之、乎美奈弊之」の他、「佳人部為、美人部師、娘子部四、婦部志、婦部思、女郎花、美妾、姫押」を用いて記き表わしており、文字の上から「をみな」を連想した花の名であったことは疑いない。しかし、中古以降のいわゆる「をんな」と同一視することはできない。

『能因歌枕』には、「をみなへし、女にたとへてよむべし。」と言っている。中古の「をみなへし」観が歌学書に端的に表わされている例であるが、中古以降この花は、尾花や萩、おとこえしの咲き競う秋の野で、風のままに揺れながら、眺める者を招き寄せるように靡き、露に乱れ伏すという、おんな・遊女の風情で擬人化され、「伏見・あだし野・待乳山・いなみ野・いはれ・男山」などの地名と結びつけられながら、色めかしくなまやかに、和歌を妖しく彩るのである。

題しらず

僧正遍昭

名にめでておれる許ぞをみなへし我おちにきと人にかたるな(古今和歌集 巻第四 秋歌上 二二六)

僧正遍昭がもとに、ならへまかりける時に、おとこ山にて

をみなへしをみてよめる ふるのいまみち

をみなへしうしと見つゝぞ行きすぐるおとこ山にしたてりとおもへば(同 二二七)

僧正へんぜう

秋の野になまめきたてるをみなへしあながしがまし花もひと時(同 巻第十九 誹諧哥 一〇一六)

前栽に女郎花侍ける所にて

女郎花にはふ盛を見る時ぞわが老いらくはくやしかりける(後撰和歌集 巻第六 秋中 三四七)

山にかたわきて花をつくりけるに、かたきのかたに

をみなへしをつくりたりけるを人人をかしがりければ、

ねたくてよみてむすびつけける

僧都観教

草も木も仏になるといふなれどをみなへしこそうたがはれけれ(続詞花和歌集 巻第二十 戲笑 九六三)

以上選出された歌には筆者の恣意がかなり働いているが、発想の基はおおむね右の歌のようなところにあり、八代集の中で「恋歌」に分類されたのが『後撰和歌集』に一首のみ（『和歌植物表現辞典』東京堂による。歌は巻第十二恋四 八四四 平希世で、「あひ知りて侍女の、人にあだ名立ち侍けるにつかはしける」という詞書を持つ）であることを考えても、「をみなへし」が和歌の中に占める素材としての性格が、如何なるものであったかを伺い知ることができる。

延喜御時、秋歌召しければ、奉りける 貫之

女郎花にはへる秋の武蔵野は常よりも猶むつまじき哉（後撰和歌集 巻第六 秋中 三三七）

月前草花、法性寺殿会

くまもなき月やまばゆきおのがえをかざしてたてる女郎花かな（源三位頼政 頼政集 一八九）

たぐひなきはなのすがたを女郎花いけのかがみにうつしてぞみる（西行 山家集 二八三）

これなどは美しい姿の「をみなへし」が歌われている。しかし、己が美を誇るある種類廃的な「をみなへし」には、固定化した観念の「をんな」によって発想された擬人化がある。

たれをかもまつちの山のをみなへし秋と契れる人ぞあるらし（小野小町 新古今和歌集 巻第四 秋歌上 三三六）

秋ののの花のなたてにをみなへしかりそめにみむ人にをらるな（伊勢 伊勢集 一八七）

右二首は、小野小町と伊勢の歌であるが、さすがに男たちの揶揄を見兼ねて、一本釘をさしたと読めて面白い。身分の卑しい女を連想する「をみなへし」で、しかもそれが植物であるにもかかわらず、同じ女として心に感じるところがあったのであろうか。歌には庇保の中に哀調さえ宿ると見るのは考えすぎであらうか。ともあれ、『万葉集』と『古今和歌集』以降の「をみなへし」の違いは、異質の文化を感じさせる程大きかった。